

移りて後後 ○今年米穀豊饒あり

○小田系不老山壽松院今年由地小移さるれ今の龍治橋の由と境をぬくる後年神田柳系の辺へ移り又後系へ移る。

文禄二年乙未

武蔵小別成光次と書書以武蔵と後河原ふりて遷せり ○小田系當知山本移さる江戸小移るひ日は谷橋所町の辺へ地をぬくる後る喰町の辺へ移り天和二年の後今の地へ移る。○芝長見安集云丹町と江戸市のあひまちひさた橋只一ツあり是ハ後河原の橋あり文禄二年夏のよりうけ橋のりあるの残籠を捨ちて水系移るも定りてあり。官府へさるもつりてさるうけ橋を残籠橋といふとありさるるに船町兼江戸市町に今の残るの橋のありふま一橋ある。

慶長元年丙申

七月閏 土月二十七日改元

一歩系小別金始て通用芝長見 ○六月十二日系原歳内算東法大 羅毛長又求毛障毛長 ○閏七月朝鮮人來渡毛長 ○閏十二月大地震月を途毛長 止毛長 ○波河屋を築くる ○多田宗玄といふ人靈告をさるりて系部東山の辺より某師像を持ちり奉座ふ安ん今多田の某師あり ○税町常仙毛長と宗基毛長家某師を安ん

同二年丁酉

新田小光毛長感山毛長感夜毛長と宗刺毛長 昇山日感上人あり此は地不疎於七年ちを延る今皆ゆふ其計田感夜とといふ

同三年戊戌

松平為頼と後別とより江戸波河屋の下へ移る後河原系 移り今の波河原へ移る

○八月三縁山塔上寺日は若より今の地へうつる若より今の地へうつる

谷町の方ありしところの辺をひや町といふむう八潮入の地より漁人海中不枝竹の竹を獲て置く魚の入口をたてしむるをひや町といふ事あり今も海若きとらふにヒヤを  
用ひひやをききをおりの役居の地あるひや町といふは後世にふらうの事ありてはひや  
や町と号しける後り世にあらうむむ町といふは後世にひや町といふ事ありてはひや  
○後世に泉養寺宗判 ○十月令鳳山高林と後河原と宗判あり  
後年約込と名付し移る

慶長二年己亥 二月四日

二月令別山純室天 神田屋本宗判 實永十二年  
後年約込と名付し移る

○始て系於不徳司代を置る ○池上本門より大塔建立 翌年より  
合く成徳を

小判小光次と書書せしを極中に改める 光次は地元の ○六郷橋再樹 長保  
の久事あり

同六年辛丑 十一月四日

八月大小分別提銀の形制を定めぬ 後河原 大急銀もけ時より置る すま  
判指といふ

○貞綱改要板流 孔子家語武冠七書板行せしめぬ 清治世以来の刻本  
あふ不始るあり

○安南始て奉書實永九年より通治而絶東浦塞始て奉書實永  
九年の后絶するあり安南始て奉書實永十八年迄今年より實永十九

年まで二十二年のる清茶市船とて我々へ商人亞馬港ノヒスハニ還環安  
南呂宋木の國へ小年毎不行して高貴へ船亦も私亦行して高

本年く不絶といふ 以上奉康親  
漢而載

○十月十六日大地震房総の山を崩し海を埋むと浪又海上俄り潮  
引す二十餘町行消と成る十七日潮大山の如く巻上流死數

○十一月二日己の刻後河町事々恐ろし火をわけて大焼亡不江戸町  
一字も残る人多く死す早光町中早光坂火事絶は序小塔





此の時遠慮あり... 事深人喜る公衆本堂の懸ね植の事あり  
進る如くも事ありても事あり

○大城津普濟寺村柵町のる場津用比もあつたの辺の遊女等とも元誓  
預る前へうつる○此の時遠く小道橋もあつた武家藩邸も移る

○南宮より大谷藩林を渡り長途ゆく梅の切つてめて大谷を裁る  
一夜天心中賢人  
持渡るもりの

享和十一年 丙午

大城を築たあつた二月より始り九月に成たあり その時如敷把後より清正把後より  
大石を築てりせし備よりひうり

自ら兵糧のお立しき者取 ○選置(清書兵物とも賜る波空の使もあつた 清書兵  
六十年

のほろより商船のちえん 以上事深難波ありて事深大田深くひ  
國々不詳りての番丹のあまりのこと

○六十六州清書を結て枯る○本年馬場と三河橋前後河を流るる後

のり○十二月八日永樂銭法停止通より用ひて正月日本橋へこれ

享和十二年  
とむり

小泉氏康の防軍本中て永樂銭を用ひて令せられびて銭の上からより天下は  
一統となり二銭に更て用ひるも永樂一銭のつたりおびては只銭を更てきよんは  
おのては兵をえらひひひ安んじたりて今年永樂を止めひひは永樂代記ありり  
或は永樂一銭の合まきあはせりて合ふりりつた百餘の一銭の除きては銭は今  
而も永樂の年更あつたは遠慮ありびて百餘の永樂を後  
永樂一せんの價を除く九十六銭をりて通用せりり

同十二年 丁未 二月間

二月十三日より十六日まで 清城の色を親世金春勅進能具行あり

同廿日同前よりあつた雲の神子が國勅進奇舞妓具行あり 具行は舞妓小あつた  
お雲の村を  
お雲の村を

いふ人の娘とておふり たて  
お雲の村を

の事山本の骨董集 たて  
お雲の村を

養て火を吹をけりて吸ひを後ひきせりて用ひて銭は止せりて製るの法を  
用ひて外のラウを用ひて又火をきりての事を記すりて進りせる事ありり

○迎清園白伝平公清中向ありは時梅老もよ母とて改めひ歌をかか

享和十一年









